

平成二十八年度 第三十二回 卒業式 式辞

厳しい寒さが続いた冬が過ぎ、ここ甲山にも春の息吹が感じられる今日のよき日、兵庫県立西宮甲山高等学校 第三十二回卒業証書授与式を挙げていただけますことは、誠に大きな喜びであります。

本日、お忙しいにも関わりませず、ご臨席を賜りましたPTA会長様をはじめ、多数のご来賓の方々に、高いところからではありますが、心より厚く御礼申し上げます。

そして、ご列席くださいました保護者の皆様におかれましては、お子様のご卒業を心からお祝い申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました百八十五名の皆さん、あらためて卒業おめでとうございます。私は、三十二回生の皆さんとは、二年間の付き合いでしたが、皆さんからたくさん感動をいただきました。そして、代表の青木朱音（あおき あかね）さんを始め、皆さんに卒業証書を授与できたことは、この上ない喜びであります。

今、皆さんの脳裏には、甲高での三年間の生活が走馬燈のようによみがえっていることでしょう。この日がくるまでの三年間、学業のこと、部活動のこと、家庭のこと、友だちのことなど、いろいろと思い悩んだことも多かったのではないかと、思います。様々な悩みを克服し、見事、本日ここに卒業の日を迎えることができたことに、心から祝福の意を表します。また、この日を迎えることができたのは、家族、友人、その他多くの人々の暖かい励ましと、支援があったことを忘れてはなりません。

ここで、卒業していくみなさんに、私の心に残っている2つのことについてお話しします。

一つ目は、私の好きな作家の一人である、司馬遼太郎さんに関することです。彼は随筆「二十一世紀に生きる君たちへ」のなかで、次のように述べています。

「君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。自分に厳しく、相手にはやさしく。という自己を。そして、素直で賢い自己を。」また、「自己といっても、自己中心に陥ってはならない。人間は助け合って生きているのである。私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。斜めの画が互いに支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。」と。

私は、皆さん一人ひとりに、自分の頭で考え、自分の判断によって行動し、その結果起きた事実は自分で引き受けるといった自己を確立し、「たのもしさ」を持って自立した個人として生きて欲しい、と思っています。また、人と人とは、不思議な縁で出会い、言葉を交わし、共鳴し合い、愛情や友情という最も美しい関係を育んでいきます。その関係を保つためには、相手の立場を思いやる心を、常に持ってほしいと願っています。

そしてもう一つは、「黒板に書かれたメッセージ」です。これは、職員室前の廊下にある学年連絡黒板に、三十二回生の学年主任である、山崎千枝（やまさき ちえ）先生が、毎週記していた君たちへのメッセージです。日番の人や、用事のため職員室に来た人は、目にしていたのかもしれませんが、そこには、その時々山崎主任の熱い思いが書かれていたのです。

数々のメッセージの中から何点かを、今、改めて君たちに伝えます。

【9月5日～ 第1週のメッセージ】

「チーム32回生」として過ごせる日を大切にしながら、互いに切磋琢磨できますように

【9月12日～ 第2週のメッセージ】

ソーランの練習をとおして、仲間と心をひとつにし、32回生の「革命」を見せてください。勉強もしっかりと。

【9月19日～ 第3週のメッセージ】

勉強も行事も全力で甲高生として良き範を示しているか自分に問いつつ、1日1日を大事に過ごしてください。

【9月26日～ 第4週のメッセージ】

皆の心をひとつにし、「ソーラン」の発表につなげてください。32回生の「革命」を楽しみにしています。

【10月3日～ 第1週(体育大会直前)のメッセージ】

より高く、より速く、より華麗に、どこまで心をこめられるかが肝心なのだと思います。甲高で最後の体育大会、皆の思いを形に表してほしいと思います。

【10月11日～ 第2週のメッセージ】

体育大会、お疲れ様でした。すべての行事が終わりましたね。卒業までの日々、精一杯、大切に過ごしてください。

・・・ そして、年が変わって ・・・

【1月10日～ 第1週のメッセージ】

バスに乗り、通い慣れた坂道をあがってくるのもあとわずか。最上級生としてのあるべき姿を示しながら、精一杯過ごしてほしいと思います。

【1月18日～ 最後のメッセージ】

何事にも限りがあると知る時、こみあげる思いがあるはずです。最後の1週間が32回生ひとりひとりにとって充実したものでありますように。

いかがですか、どんな著名な人の言葉よりも、君たちの身近にいて、君たちの成長を心から応援していた先生の気持ちの方が、ストレートに伝わってきて、皆さんの心を打ったのではないのでしょうか。

さて、本校のあるべき姿を目指して、皆さんの先輩である三十一回生が切り開いた道を、三十二回生の皆さんは、しっかりと踏みしめて固めていく重責を担っていたのではないかと私は思っています。これからは、皆さんが歩んだ跡を、しっかりと確かめながら、さらなる改善を加えて、後輩たちが歩いていくこととなります。皆さんが残してくれた成果を、いかにして定着、発展させていくかが、私の大きな仕事のひとつであると考えています。西宮甲山高校の今後を、楽しみにしててください。

最後になりましたが、卒業生の皆さん一人ひとりが、本校の校訓である基の精神「己を究め、ふれあいのなかに、明日を拓く」を胸に刻み、「自らの夢をあきらめない人」としてたくましく成長され、活躍されること、さらには皆さんの前途に幸多からんことをお祈りして、式辞といたします。

平成二十九年 二月二十八日

兵庫県立西宮甲山高等学校
校長 松本 修身